

2010年度 海外研修報告（南アフリカ共和国）

筑波大学附属高等学校 中塚義実

この報告は、第19回FIFAワールドカップが開かれた、南アフリカ共和国の視察報告である。報告者は6月11日（金）の勤務終了後から6月17日（木）まで「海外研修」の形で勤務地を離れ、FIFAワールドカップという“人類の祭典”と、開催国である“南アフリカ共和国”を体験した。

帰国後間もない6月20日（日）、千駄ヶ谷駅前の「SAMURAI BLUE CAFÉ」（期間限定の日本代表応援カフェ）にて、スポーツ文化研究会「サロン2002」の月例会が開かれた。この組織は、報告者が理事長を勤める会員制の異業種ネットワークで、150名ほどの会員は、全国各地でサッカーなどのスポーツ・文化的活動に携わる方々である。通算165回目となるこの日の月例会のテーマは「南アフリカに行ってきました！」。南アフリカへの出発を目前に控える者もあり、参加者の関心は「日本代表」よりも、「ワールドカップ」、そして「南アフリカ」という国に向けられていた。

本報告は、この日の月例会の内容をベースとしているが、質疑応答は省略して本文中に組み込み、今回の海外研修の全容が網羅できるよう再構成した。サッカーやワールドカップに興味がある方だけでなく、多くの方々に目を通していただきたいと考える。

なお、本報告はサロン2002オフィシャルサイトに掲載されるのでご参照いただきたい。

サロン2002オフィシャルサイト <http://www.salon2002.net>

《サロン2002：2010年6月例会報告》

南アフリカに行ってきました！

－FIFAワールドカップ南アフリカ 研修報告－

中塚義実（筑波大学附属高校／サロン2002理事長）

【日時】2010年6月20日（日）17：00～21：30（飲み食いしながら）

【会場】SAMURAI BLUE CAFÉ <http://sbcafe.jp>

【テーマ】南アフリカに行ってきました！－FIFAワールドカップ・南アフリカ大会研修報告

【報告者】中塚義実（筑波大学附属高校）

【参加者（会員）11名】伊藤慧（NPO法人スポーツ指導者支援協会／JFAアカデミー福島、熊本宇城） 奥山純一（会社やめて50日だけの旅人） 金子正彦（会社員） 岸卓巨（DUOリーグ事務局） 小池正通（杉並アヤックス） ★幸野健一（三幸企画） ★関谷綾子（静岡で自分の事務所持って弁護士やっています。スポーツ代理人を目指して勉強中） ★高田勝敏（元（財）東京都サッカー協会職員／元ベルリンサッカー協会研修生） 田中俊也（三日市整形外科） 中塚義実（筑波大学附属高校） ★本郷由希（金融・アドバイザー業務）

【参加者（未会員）2名】鈴木一浩（紹介者：幸野健一） 溝口絵里加（サムライブルーカフェの女子マネージャー。元体操選手）

注）★は2010年度からの新会員。参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

■研修の概要

<期 間>

2010年6月11日（金）～6月17日（木）

注）6月11日（金）は勤務終了後に出発。6月16日（水）～18日（金）は前期末試験のため、6月14日（月）と15日（火）のみが授業日。この間、保健の授業は時間割変更で対応し、体育実技は同僚の教員に代行してもらった。同僚の配慮に心より感謝いたします！

<参加ツアーと経費>

株式会社セリエ（観光庁長官登録旅行業 第1849号）の企画する「ワールドカップ南アフリカ2010観戦ツアー 4泊7日間（コースコードJGS-01a-L/HND）」に参加。旅行代金498,000円と、オプションツアーとしてのプレトリア観光（6,500円）、ブラジル vs 北朝鮮観戦（54,000円）はすべて自費！

<日程と主な活動>

6/11（金） 仕事を終えてから羽田空港へ。

羽田20：40→21：55関西空港23：15→（10時間半）→4：45ドバイ（時差5時間）

6/12（土） ドバイ観光：タクシーと交渉、市内の主要な観光スポットを回る（約3時間、80\$）

ドバイ10：15→（8時間）→16：25ヨハネスブルグ（ドバイからの時差2時間）

「シティロジック・ホテル」（空港直結）へチェックイン

「エンペラーズ・パレス」（カジノ、レストラン、ショッピング街）までタクシー移動

スポーツバーでイングランドvsアメリカ合衆国を日本人6名で観戦

6/13（日） 午前はプレトリア観光ツアー

（日本人4人、ブラジル人2人。ツアーガイドは黒人南アフリカ人）

午後はアパルトヘイト・ミュージアム見学ツアー（多国籍）

夜はヨハネスブルグ空港内で飲食（日本人3名）

6/14（月） 6：30ホテル発→ブルームフォンテンへバス移動（5時間半）→12：00昼食

→ 13：00頃 フリーステイト・スタジアム着

16：00キックオフ 日本1-0カメルーン

→ ヨハネスブルグへバス移動（5時間半）→24：00頃ホテル着→ワイン購入

6/15（火） 午前～午後にかけて「ローズバンク・モール」および空港でショッピング

17：00集合・出発 → バスでエリスパーク・スタジアムへ移動（17：30着）

20：30ブラジル2-1北朝鮮 → 23：30頃ホテル着 → ワイン購入

6/16（水） 11：00ロビー集合 → 空港へ

ヨハネスブルグ14：10→（8時間）→0：10ドバイ

6/17（木） ドバイ3：10→（9時間）→17：20関空19：15→20：25羽田

<備 考>

「2010 FIFAワールドカップ 南アフリカ大会視察について（お願い）」という文書を、財団法人日本サッカー協会 技術委員長 西村昭宏 名でいただいた。「この度、日頃より、本協会の指導者養成事業などにご協力していただいております貴所属 中塚義実 氏が標記大会を視察されるとの連絡を頂きました。つきましては、同氏の視察について、貴校のご高配を賜りますようお願い申し上げます」という内容。

前回の2006ドイツ大会では「派遣依頼状」を発行していただいたが、今回は「お願い」という形の文書にとどまった。

■はじめに

<FIFA ワールドカップと私>

サッカーを本格的に始めたのは 1974 年、中学 1 年のとき。その夏、FIFA ワールドカップが西ドイツで開かれていたことは、大会終了後、書店に並ぶ雑誌で知った。ベッケンバウアーの西ドイツがかっこよく、あこがれた。友人にはクライフの率いるオランダに狂っている者もいた。私の中学サッカー部のユニフォームは、顧問の先生の趣味か、西ドイツ型となったが、次にもう 1 着作ったときはオランダ型となった。いずれもまがいもののメーカーの、ごわごわしたユニフォームだった。

1974 年大会の様子は、夏以降、「ワールドサッカー」（首都圏では「ダイヤモンドサッカー」として放送）という番組で知ることになる。その頃は火曜日の 22:00 から 45 分間の番組だったと記憶している。前後半を 2 週に分けて放送する番組と、岡野俊一郎さんの解説を通して、海外のトップレベルのサッカーと、それを取り巻く世界各国の環境について、日本との違いを感じたものである。

1978 年のアルゼンチン大会は、高校 2 年の時。1974 年はワールドカップを知ったのが大会終了後だったが、今回は高いモチベーションでワールドカップに臨んだ。しかしながら、当時放送権を持っていたはずの NHK は、まったくと言っていいほど試合を放送してくれない。夜のスポーツニュースを毎晩チェックしていたが、出てくるのはプロ野球と大相撲とゴルフばかり。ワールドカップの情報は、試合結果と、時折流れる短い映像だけ。それでも 3 位決定戦と決勝戦は衛星生中継での放送となり、わくわくしていた。3 位決定戦は夜中に起き出し、ネリーニョ（ブラジル）の右サイドからの強烈な回転のシュートがゾフ（イタリア）の守るゴールに突き刺さった場面が脳裏に焼き付いている。しかし、あれだけ楽しみにしていた日曜日深夜（月曜日早朝）の決勝戦を、寝過ごして見逃すという大失態！ 17 年間生きてきた中で最大のミスであった（日曜日に、大阪府の強豪、北陽高校と練習試合をしてきたばかりになり、目覚ましを二つかけていたのに気づかなかったことまで鮮明に覚えている。ついでながら、結果を知らないまま一日過ごし、19:00 からの再放送を新鮮なまま見るという作戦も、体育の授業の着替えのときに「昨日のアルゼンチンすごかったのう」と言っている友人の話し声によってダメになったことも、昨日のこのように記憶している）。

ワールドカップは、雲の上の存在であった。1986 年メキシコ大会への扉が開かれそうになったけど、やっぱりダメだった。ワールドカップはテレビで楽しむものであり、強い代表チームを持つ国の人々と、サッカーをこよなく愛する世界中の人々のお祭りであり、日本とアメリカ合衆国の人々は、この“人類の祭典”には無関係な存在である（だから世界の仲間になりきれない）と感じていた。

1994 年大会は、そのアメリカ合衆国で開かれた。そして日本でも、1993 年に J リーグが誕生した。

1996 年 5 月 31 日の FIFA 理事会で、2002 年 FIFA ワールドカップが韓国と日本で共同開催されることが決まった。“人類の祭典”が日本に「関係する」どころか、「やってくる」ことになった。

ホスト国として大会を迎えるまでに、日本は本大会に絶対出場してはならない（出場経験がないのに開催国となるのは第 1 回のウルグアイだけ）。1998 年フランス大会は、日本にとってはそういう大会だった。予選は本当に苦しかった。ホーム&アウェイで行われた最終予選。日本サッカー協会科学研究委員会（当時）のメンバーであった私は、すべてのホームゲームを国立競技場の一番上のブース席で、ゲーム分析スタッフとして観戦した。もちろん仕事はこなしたが、天国と地獄を行き来する状況は、いま思い出してもドキドキする緊張感があった。

そしてジョホールバルの歓喜！

日本代表は初めて“人類の祭典”への出場権を得る。

<海外研修へのこだわり>

2002 年にはホスト国として、世界中から人々を受け入れる。その国の住民でサッカーに深く携わってきた者が、ワールドカップを体験しないまま 2002 年を迎えていいのか…。1998 年フランス大

会にはどうしても行かねばならないと、大きな使命感に燃えていた。何としても、FIFA ワールドカップをこの目で見て、体感しておく必要がある！

とは言っても、高校の教員としての本務がある。授業や部活動、校務など、穴を空けてはいけなし、職場の理解が必要なのは言うまでもない。また、公務員（当時。国立大学法人となつたいまは公務員とは言えないが、公的な職であることは確かである）である。得たものは私的所有物ではなく、できるだけ公の財産にしていかななくてはならない。

そのためにも、しっかりした形で見に行きたい。「休暇」ではなく「研修」で。

そして帰国後はしっかりした報告書（読み物）を作成して、さまざまな形でフィードバック。

1998年フランス大会ではじめて「海外研修」として行かせてもらったときから今日まで、この部分にはこだわり続けている。幸い私は、財団法人日本サッカー協会（JFA）でさまざまな仕事を担っている（指導者養成共通科目講師、レフェリーカレッジ講師など）ので、JFAからの文書を求めることもできる。それに、スポーツ文化研究会「サロン2002」というアウトプットの場がある。

こうして、1998年（フランス）、2002年（韓国および日本）、2006年（ドイツ）、そして2010年（南アフリカ）と、海外研修の形で訪問させていただいている。

今回の「研修承認願」の「研修内容」には、次のように記した。

「4年に一度開かれるサッカーのワールドカップにおいて、1998年のフランス大会より現地での研修を実施している。研修成果は毎回報告書にまとめ、関係各署に配布するとともに、授業や研究会等の内容に反映させている。今回の南アフリカ大会では、日本vsカメルーン、ブラジルvs北朝鮮の2試合を視察するとともに、南アフリカ国内への社会的影響、大会運営などを考察し、本務に活かす所存である。」

■6月12日（土）

<最初の訪問国である UAE ドバイ観光>

ドバイ空港に着いたのは朝の5時前。24時間営業の中継地であるドバイ空港は、（たぶん）昼も夜も関係なくにぎわっている。

羽田空港でチェックインした時点では、荷物はヨハネスブルグへ直行となり、もしドバイで降りるなら「税金がかかる」ことや「荷物をピックアップしなければならない」ので「別の手続きが必要」と係員の女性に言われ、ややこしいから「ドバイでは降りません」と言っていたのだが、ドバイ空港に着いて、入国と乗り換えの分岐点にさしかかったときに、どうしても行かねばならないと思い、一転、UAE 入国を選択した。

株セリエの徳田氏からあらかじめ聞いていた方法で動いたところ、難なく入国でき、タクシー乗り場へ。空港を出た瞬間、もわっとした熱気に包まれたが、それが朝の涼しい時間帯である。

タクシーの運転手には、徳田氏からのメモ書きのとおり「リビエラホテルへ行ってくれ」と言うと、「そこは何もないぞ」と言われたが、とにかくその方向へ行ってもらおう。移動しながら、「伝統的なアラブの町並みを見たい」とことや「次の飛行機が10時過ぎに出発なので、9時前には空港に戻りたい。それまでにドバイを観光したい」とことなどを告げると、運転手も慣れたもので、ガイド付きで回ってくれるという。「70ドルでどうだ」との話だったが、「予算は30ドルだ」というと、「タクシー代だけでも50ドルはかかる。ガイド代20ドルだけだ。ガイド代はなくてもいい」という話。よっしゃということで、70ドルで回ってもらうことにした（タクシー代が当初の予定よりかかったこともあって、最終的には80ドル払った）。

まずは川べりのアラビックな町並みへ。「ヘリテージ・ヴィレッジ」のあたりを散策した。日の出前だったが、車から降りたとたん、熱気が襲い、カメラのレンズが曇る。早朝からウォーキングしている人々がいる。日中は暑くて動けないそうだ。熱気はムンムンだが、川べりは気持ちがいい。

車で移動中も、ここはイスラム文化圏なのだというを感じさせるモスクが至る所にある。運転手のアズハルザワン (Azharzawan Cheema) さんも敬虔なイスラム教徒。1日5回のお祈りは欠かさない。仕事でお祈りができないこともあるが、そのときはあとでまとめてするのだという。毎週金曜日はモスクに礼拝。だから学校も会社もすべて金曜日がお休み。翌土曜日も休みで、日曜日から1週間の活動が始まるという。

しかしこの日は土曜日。本来は休みのはず。そのことを指摘すると、勤務は毎日深夜2時から昼まで働くシフトであり、土曜日の安息はないそうだ。新婚3ヶ月の彼はなかなか大変そう。

ちなみに彼は、メッカ(「マッカ」と聞こえる)には行ったことがないが「ぜひ行きたい。けどまず、母に行かせてあげたい。自分が行くのはそのあとでいい」とのこと。こちらはいい加減な英語だが、彼の英語は達者。「人は死んだらどうなるのか」などシビアな会話し、結構意気投合した。

海水浴場に来た。「ジュメイラ・ビーチ」である。早朝なのに海に浸かっている。写真撮影はできない。宗教的な理由があるらしい。

アラビア湾沿いの道路には、高級ホテルが並んでいる。地図でみると何とも不思議なかたちをしている「アトランティス」へ向かった。その先端のホテル・アトランティスに着いたのは6:30頃。案外小さな町である。短時間でぐるっと回れる。

王様がお金を出して近代的なホテル群を整備しているとのこと。そもそもこの国は、ドバイをはじめとする7つの首長国が集まって構成されている国。道路から見えた看板に、ドバイの王様とUAEの王様が並んで写っているのがあった。王様は男性の世襲制で、男の後継者がいなかったらよそから来てもらうそうだ。語学力のつたなさでそれ以上はわからなかったが、あとで調べたい。

「バージュ・ハリファ」は世界最大の828m、160階建ての超高層ビル。よくこんなものを作るなあ后感心した。

ドバイの競馬場にも行った。だだっ広いところにある。その奥にはラクダ競走場があるらしいが、時間がなくなってきたのでそこは行かなかった。

小さな町だが、いろんなものが詰まっている。伝統的なアラブの町並、イスラム文化圏の香を残しつつ、猛烈な勢いで近代化し、超高層ビル群が立ち並ぶ。日本の都市がかつて歩んできた道を、この都市も歩むのだろうか。それともこれはまったく別のムーブメントなのだろうか。もう少し考えたい。

空港に戻って来たのは8:40頃。タクシーのメーターは、ドル換算すると75ドルになっているという。若干のガイド代含め、アズハルザワンさんに80ドル渡してお礼を言って別れた。メールアドレスも聞いたので、また連絡を取り合いたい。

<エミレーツ航空機内にて>

関空からドバイが10時間半(帰りは9時間)。ドバイからヨハネスブルグは8時間。

エミレーツ航空の機内サービスは充実している。手元のコントローラーの使い方さえわかれば、映画でも音楽でも見放題。往路はうまく使えなかったのが、ワールドカップとかサッカーというところだけみていたが、1966年の記録映画「GOAL」や、ドイツとイングランドのライバル関係を取り上げたドキュメンタリーをみた。このドキュメンタリーは、第1次世界大戦から始まっている。本当の戦争で戦い、そしてワールドカップでも過去何度も、“疑惑のゴール”を含めた興味深い対戦がある。後日談ではあるが、今回もあった。フットボールは歴史とともにある。

機内はたぶん飲み放題だっただろうが、エコノミークラスの座席が期待していたより狭く、窮屈であまりくつろげなかったこと、映画が楽しみだったこと、また、いつ寝たらいいのかが実感できなかったこともあり、それほど飲まなかった。機内食のたびに少し飲んだ程度。

ちなみに、関空～ドバイの機内での3人がけの隣席はチェコ人のカップル(夫婦?)だった。何らかの会議で京都を訪れたらしい。会議と言っていたが、彼らは難しそうな本を読んでいたのが、学会に参加したのだろうか。あまり会話に興じることはなかった。ワールドカップで南アフリカに行くの

だと言うと、「ワンダフル！」と言っていた。今大会、チェコは予選敗退で出場できず。代わって、もとは一つの国だったスロバキアが本大会に初出場した（これも後日談だが、イタリアを破って2次ラウンドまで進出したのは立派！）。

ドバイ～ヨハネスブルグでは、右隣にドイツ人が座った。ぶっきらぼうな感じの奴だったが、奥さん（後ろの席に座っていた）とワールドカップ観戦に来たらしい。4年前はニュルンベルクで日本の試合を見たと言っていた。この頃になるとコントローラーの使い方もだいぶわかるようになっていた。

<ヨハネスブルグ国際空港からホテルへ>

17:00過ぎに、ヨハネスブルグ国際空港の出口に着いた。(株)セリエ添乗員の江口さんが待っていてくれた。ここではじめて添乗員が登場する、旅慣れた人向けのツアーである。数人の日本人が同じ便で動いていた（つまり同じツアー客である）ことがこのときわかった。

ヨハネスブルグ国際空港は、ドバイ同様、24時間営業の国際的なハブ空港。ワールドカップ期間中ということで、たぶんいつも以上にぎわっていたのだろう。そこかしこからブブゼラの音が聞こえる。サポーターの歌声も聞こえる。地球人のお祭り会場にやってきたという感触である。

宿泊する「シティロジック・ホテル」は、聞いていたとおり、空港直結の新しいホテル。セキュリティもしっかりしている。ちょうど参加人数の関係で、ダブルベッドの部屋をシングル利用することができた。混んでいたら、ダブルベッドを男同士で利用するのだろうか。なんか気持ち悪い…。

<エンペラーズ・パレスで懇親会>

セリエの徳田氏は、16:00キックオフのアルゼンチン vs ナイジェリアの添乗業務のため、ヨハネスブルグ市内のエリスパークへ行っている。「戻ってきたら飲みましょう」とのメッセージをもらっていたので、空港をひととおり散歩したあと、19:00過ぎにホテルへ戻った。徳田氏もちょうど戻ってきたところ。せっかくなので、2名の女性添乗員（江口氏と森田氏）と、一緒の飛行機で南アフリカ入りした2名のツアー仲間（安里氏と鯨井氏）とともに、イングランド vs アメリカ合衆国の試合をテレビ観戦しながら飲もうということになった。

徳田氏のお勧めは、タクシーで15分ぐらいのところにある「エンペラーズ・パレス」なるカジノ。その中にスポーツバーがあるので、そこを目指して行くことになった。ワゴン車のタクシーで移動。

カジノなんて入ったことなかったけど、多国籍の人々が楽しんでいる。セキュリティチェックもしっかり為されているので、安全地帯ではある。だだっ広い空間の一角に飲食街もあり、スポーツバーもいくつかあった。結構混んでいたが、なんとか座れるところを見つけ、乾杯。自己紹介をしつつ（皆が初対面）、試合観戦しつつ、盛り上がる。

我々が入った店の客層は若い。「高校生とちゃうか？」と思われる一団がいたので、ちょっと突っ込んでみた。高校は卒業しているとのこと。ほんまかいな？ 南アフリカ人で、イングランドを応援しているらしい。これは本当のようだった。

試合後、エンペラーズ・パレスの中でもう1軒行き、地元の料理とおいしい南アフリカのワインを十分堪能した。

ちなみに、(株)セリエの添乗員の女性2名はいずれもロンドン在住。普段はプレミアリーグ観戦ツアーのガイドをやっているが、ワールドカップ期間中は（当然だが）プレミアリーグはやっていないし、ヨハネスブルグ在住の日本語ガイド（3名しかいない）は大手旅行代理店に占有されてしまっているので、ロンドンから助っ人でやってきたという。この人達もヨハネスブルグに着いた初日であった。

「南アフリカまで来ちゃう人たちは、たぶんブラジル（2014年大会）も行くでしょうね」とは、皆の一致した見解。23:30過ぎまでそこで飲み食いし、ホテルへ戻ったのは翌日になっていた。

長い長い一日だった。

■6月13日（日）

<プレトリア観光ツアー—寝坊して遅刻！>

当初、地元業者が企画する、ソウェト（South Western Township の略。黒人居住区の一つでアパルトヘイト時代の名残）観光ツアーに申し込んでいたのだが、ちょっとしたトラブルがあったらしく、ツアーは中止（6月16日が「ソウェト蜂起」の記念日にあたるため、何かあるといけないので、この前後のツアーが中止になったようだ）。代わりに「プレトリア観光ツアー」に変更してもらっていた。直前の変更なので、現地の業者とは連絡が取れないまま当日を迎える。この日の私は単独行動。

そして、よりによって、こんな日に限って寝坊してしまう…。

朝の8:15にサントン地区の「ミケランジェロホテル」から出発となっている。集合時刻は書かれていないが、その15分前には集合のはず。6:30に起きて準備をして行く予定が、目が覚めたのは7:15！ ここ数年したことがない“寝坊”である！

ダッシュで空港隣接の「ハウトレイン」（最近できた鉄道）の駅に向かう。終点のサントン駅までの往復切符を購入（カード代10ランド含め、往復210ランド）。15分で着くというハウトレインはすぐ来たので、これで大丈夫とほっとしたところ、いつまでたっても駅から出ない。どうやら20分に1本しか動いてくれない様子。ヨハネスブルグ空港を出たのは8:00だった。遅刻確定！

サントン駅に着いたのが8:15。駅からホテルへの道もわからない。何人か地元の人に聞いたが、あっちへ行ったりこっちへ行ったり。ミケランジェロホテルにたどり着いたのは8:30ごろで、「もうアカンかなあ」と半分あきらめていた。ホテル前にいる人に尋ねると、「あなたのことを探しているガイドがいた」とのこと。そのガイドはドナルドという名の黒人。一所懸命、遅刻者の行方を捜してくれていた模様。ホテル内で出会ったときは大変喜んでくれた。他のツアー客にも迷惑をかけてしまった私は、大変恐縮し、「遅れてすみません」と英語と日本語で言って、ワゴン車の中に入った。

このツアーは、現地の「ILIOS TRAVEL」という会社が企画するツアー。私以外は、日本人男性3人組（彼らはプレトリアで行われるセルビア vs ガーナを午後は観戦）とブラジル人カップル。そしてガイドのドナルド。ドナルドというのは英語名で、アフリカ名は「タハニャーニ」。アパルトヘイト以前に生まれた彼は英語名を持っているが、彼の息子は英語名は持たないそうだ。彼の英語での解説で、首都プレトリアへのツアーが始まる。南アフリカの勉強と、英語の勉強である。

<白人による南アフリカの“開拓”物語>

30分ぐらい走った9:15頃、最初の目的地である「フォールトレッカー開拓者記念堂 Voortrekke Monument」に着いた。ここはアフリカーナー（オランダ人を先祖にもつ白人）の聖地であり、「南アフリカ国内でもっとも有名な記念碑。アフリカーナーの祖先がケープ地方を捨て、自分たちの独立国家を作ろうと牛車で大移動をしたときのものだ。この旅は相当に過酷なものだったようで、先住民族との戦いや食糧難で多くの人々が倒れた。壁にはその苦難の歴史やイギリスから独立を勝ち取った喜びなどがレリーフとして刻まれており〜」（『地球の歩き方 南アフリカ』2010）とあるように、建物の中には壁画で被われており、南アフリカの歴史がアフリカーナーの立場から描かれている。ドナルドの解説も大変わかりやすく、この国に白人がどうやって入ってきたのかがよく理解できた。

スエズ運河（1859年着工、1869年開通）のなかった時代、ヨーロッパからアジアへ向かう航路は、アフリカ南端を大きく回るしかなかった。はじめにポルトガル人が南アフリカの先端「喜望峰」にたどり着く（バルトロメウ・ディアスによる“発見”が1488年、ヴァスコ・ダ・ガマがインド航路を“開拓”したのが1497年）。「大航海時代」の主役はその後、ポルトガル、スペインのイベリア半島勢からオランダに移る。1652年にオランダ東インド会社のヤン・ファン・リーベックがケープタウンに上陸、オランダ系の農民（ボーア人）が大量に入植し、植民地を作る。

ここからは、峯陽一編著『南アフリカを知るための60章』、明石書店、2010から引用したい。

「オランダ東インド会社が募集した入植者はオランダ人ばかりではなく、ドイツ人やフランス人も多かった。(中略)オランダ東インド会社は、大陸ヨーロッパで白人入植者を募集する一方で、熱帯アフリカやアジア各地から奴隷を連行してきた。先住民のコイコイ人も奴隷となった。アフリカーナーの日常生活は、これらの奴隷の労働に完全に依存するようになる。(中略)もともとケープ地方だけで暮らしていた白人たちは、今では南アの全土に広がっている。そのきっかけとなった歴史的事件が、1835年にはじまるグレート・トレック(アフリカーナーの大移動)である。1806年、イギリスがケープタウンを正式に占領した。オランダを支配したフランス皇帝ナポレオンがケープを手に入れる前に、イギリスはケープ支配の既成事実を作っておきたかったわけである。ところが、あらたな支配者イギリスは、帝国領内で奴隷制を廃止したため、反発したアフリカーナーたちは奴隷を引き連れ、牛車を仕立てて内陸の高原地帯に逃れていった。アフリカーナーは聖書の独自の解釈にもとづき、南アの内陸部は神が彼らに与えた「約束の土地」だと解釈することになる」。

帰国後に読んだ本だが、ドナルドの説明と壁画でイメージがつかめていたので、よく理解できた。白人による南アフリカの“開拓”物語は、大変興味深い。

ドナルドによると、オレンジ川という大きな川を渡る際に、多くのアフリカーナーが命を落としたらしい。そして1854年、オレンジ川を越えたあたりにオレンジ自由国(フリーステイト)をつくる(日本がカメルーンと対戦したブルームフォンテンの「フリーステイト・スタジアム」の名もここからきているのだろう)。アフリカーナーはさらに奥地へ進み、ドラケンスバーグ山脈を越えてヴァール川を越え、1852年、トランスヴァール共和国をつくる(初代大統領はヨハネス・マルティヌス・プレトリウス。プレトリアの名称はここからきている)。トランスヴァール共和国は一時的にケープ植民地に併合されたが、1880年に武装蜂起し、クルーガー(Stephanus Johannes Paulus Kruger)の活躍により独立を回復(第1次ボーア戦争)、1883年にクルーガーは選挙で大勝し、大統領に就任する。彼の自宅は「ポール・クルーガー・ハウス」として今も残り、今回のツアーでは開拓者記念堂の次に立ち寄った。南アフリカにおけるヨーロッパ人の生活ぶりをかいま見ることができた。

ヨーロッパ風の建物が並ぶプレトリア市街の中心部は「チャーチ・スクエア」という名の公園で、ポール・クルーガーの像が建っている。16:00からこの地で試合があるセルビア人とガーナ人が少しずつ集まってきている。写真を一緒にとっていたら、陽気な南アフリカの人々もやってきた。

ツアーの最後に訪れたのは「ユニオンビル」。南アフリカの政治の中心であり、官庁などが入っているらしい。ネルソン・マンデラが大統領就任演説を行ったところでもあり、映画「インビクタス」でも登場していた。ワールドカップのマスコット「ザクミ」の周りで記念写真を撮ったが、このとき私のカメラが地面に落下。以後、使えなくなったのはかなり痛い。ここから先は、買ったばかりで使い方がよくわからない最新式のビデオカメラ(これが動画だけでなく静止画も撮れるすぐれもの)の出番となった。

プレトリア観光ツアーでは、南アフリカの白人の歴史を知ることができた。事前に本を読んだり、NHKで放送していたドキュメンタリーをみて、事前学習して南アフリカ入りしたつもりではあったが、やはり実際に「その地」を訪れるのが一番である。参加してよかった。

ちなみに、開拓者記念堂では、サロン2002会員の高原氏にバッタリ会った。兵庫県宝塚在住の彼が南アフリカに来ており、この日はプレトリア観光ツアーに参加していることは知っていたし、どこかで連絡を取ろうとは言っていたが、まさかこんなところで会うとは…。夜にヨハネスブルグで再会することを約束した。

<アパルトヘイト・ミュージアム>

当初、午前中のプレトリアツアーで終えるはずだったが、ブラジル人カップルが午後はアパルトヘイト・ミュージアムへ行くため、この車もそちらへ向かうので、せっかくなので合流することにした。すでに日本人3人はスタジアムに出かけており、ここにはいない。車中はカップルとガイドのドナル

ドと私だけ。しばしカップルのジャマをする形にはなってしまったが、少人数で密度の濃い話をしながらヨハネスブルグへ戻った。

車中、アフリカ人の名前話になった。ドナルドのアフリカ名、「タハニャーニ」の話からである。

その流れで、互いの名前や住んでいるところの話など、いろいろした。女性の名はアイリーン。誰が見ても「美人」だと言うだろう。男性はヴィニシウス。発音が難しい。小柄で誠実そうな感じの男。お似合いのカップルである。彼らはブラジルに住んでいるらしい。4年後のワールドカップはブラジルで開かれる。「ブラジルにきたら家においでよ。歓迎するよ」と言ってくれた。社交辞令にしてもうれしい（後日談だが、7月末にヴィニシウスからメールと写真が送られてきた。こちらからも送った。Eメール仲間として4年間は持続させたい）。

そうこうするうちに、午後のツアー客が乗り込んできた。それぞれの待ち合わせ場所に立ち寄り、一人ずつピックアップ。最終的には、午前から引き続きのブラジル人カップルと私、それにイスラエル人（男）、フランス人（男女）、ニュージーランド人（女）、アメリカ人（男）、そして前日一緒に飲んだ鯨井氏が合流し、ミュージアムへ向かった。

午後のツアーはまず、アパルトヘイト・ミュージアム隣にある、金の採掘所跡地にあるテーマパークを見学するところから始まるが、まだ昼食をとっていない私とブラジル人カップルは別行動で、先にミュージアムのレストランで腹ごしらえをすることになった。そのため、ずっとカップルに私がつく形で、申し訳ないような見学となった。

ミュージアムの入口は、アパルトヘイトの時代を感じさせるように、白人用とそれ以外に分けられている。どちらから入ってもよいのだが、ブラジル人カップルは、係員のアドバイスにしたがってそれぞれ別の入口から入る。私はアイリーン側から入った。入ってみると、中は鉄格子によって完全に仕切られている。せつかくのカップルは、それぞれ別のところへ…。アイリーンは半分泣きそうになっていたが、30mもするとヴィニシウスと合流でき、ほっとしていた。けどアパルトヘイトの頃は、すべて別だったはず。そのことを感じさせる仕掛けであった。

館内の展示は、とてもじゃないが2時間程度で回れるものではなかった。1日かけてもいいぐらい充実していた。午前中、白人による“建国”史をみていたので、その続きのような感じである。展示の内容も、英語なので時間はかかったが、すっと入ってきた。

アフリカーナの支配権が及んでいた内陸部で、1867年にダイヤモンド（キンバリー）が、続いて1886年に金（ヨハネスブルグ）が発見されたことが、この国にとって非常に大きなできごとであったようだ。一攫千金を夢見る白人と、低賃金の労働力としての黒人が大量に内陸部に流入する。20世紀に入り、アパルトヘイトの原型が徐々にその形を見せ、1948年の総選挙（といっても投票できるのは白人のみ）でアフリカーナの国民党が過半数を占め、人種隔離を徹底する政策が本格的に導入される。なぜアパルトヘイトが導入されたのか、その期間ここで何があったのか、そしてどうやって民主的な国づくりがはじまったのか…。

議論だけではない。体を張った闘争の歴史がここにある。

もう一度じっくり来てみたいミュージアムであった。

お土産で買ったのはミュージアムの鉛筆（白と黒でメッセージが書かれている）と、学校で使うテキスト（生徒用と教師用がある）。テキストには時間を作って目を通しておきたい。

帰りの車では景色を見ながら、順にホテルを回ってツアー客を降ろしながら戻っていった。私と鯨井氏は最後になり、ホテルまで送ってもらった。1日行動を共にしたアイリーン&ヴィニシウスとの別れは寂しかったが、連絡先は聞いていたので、4年後にブラジルで再会しようということになった。

それが翌日、エリスパークで再会できるとは、この時は夢にも思っていなかった。

ドナルドとも別れ際、アドレスの交換をした。実にいいやつだった。また連絡を取り合いたい。

<ヨハネスブルグ空港にて高原氏と合流>

ホテルへ着くと、すでに高原氏が、もう一人の仲間とともに私の到着を待ちかまえていた。携帯にも何度かTELしてくれたらしいが、うまくつながらなかったようだ。理由はよくわからない。

同行者は、JFAのツアーで一緒に来ている岡崎氏である。あの岡崎選手のお兄さんで、今回は母親とともに来ているらしい。岡崎兄弟は、実は高原氏が指導する宝塚JFCの出身者。

まずは空港のオフィシャルショップでブブゼラを購入。75ランドのブブゼラを早速吹いてみたけど音が出ない。何度か試みるうちに、面白がって見ていた南アフリカ人が数人寄ってきて、「こうやって吹くんだ」と、教えてくれた。この様子はビデオでとってある。かなりフレンドリーな雰囲気。楽しい！

3人で肉料理の店に入った。南アフリカはやはり肉である。安くて美味しい。もちろんワインも。

最後はパラグアイ・リーグでプレーしていたという元プロ選手の岡崎氏は、滝川第二高校出身。当時の監督は、いまはヴィッセル神戸育成部長の黒田氏（こちらサロン2002会員）だが、コーチであった興津氏の影響を強く受けたという。筑波大の後輩である興津氏は、いまは清水エスパルスのフロントにいるが、附属高校のかつての教育実習生。ひとしきりその話で盛り上がった。

代表選手の話も色々聞いた。大会前のテストマッチの様子などから、あまり期待はできない。けどここまで来たのだから、しっかり応援してやろう。

岡崎選手は出場するだろうか。

教え子が代表選手。高原氏はうれしそうだった。カメルーン戦が楽しみになって来た。

■6月14日（月）

<ブルームフォンテンへのバスツアー>

朝6:00にホテルのロビー集合。6:30過ぎにバスで出発。この日は片道5時間半のバス旅行でブルームフォンテンへ往復する。そのため5:00に起きて朝食。そこでJFAの真田さんに会う。JFAの理事の方々もこのホテルに泊まっているらしい。「1泊5万円で高かったけど仕方がない」と言っていたが、徳田氏にそのことを言うと、「それは間に入っている業者に釣り上げられている」とのこと。徳田氏が見つめてきたこのホテルは、セキュリティもいいし、きわめて快適。

バスの中では、南アフリカの白人ガイドがいろいろ説明してくれる。けどツアー参加の日本人はあまり話を聞いていなかったような気がする。英語の説明だったので、最初からあきらめている人もいたのかもしれない。

車窓から見える風景は、ヨハネスブルグ周辺では鉱山跡地がたくさんあった。市街地を抜けるとそこは広大なサバンナ。「アフリカ」っぽくなってきた。この風景がブルームフォンテン市街地まで続く。

最初に休憩したサービスエリアでは、ダチョウとスプリングボックをみた。放し飼いにしているのか、勝手に生息しているのかはわからない。ラグビーやクリケットの南アフリカ代表チームのニックネームに使われているスプリングボックという生き物は、シカの仲間のような感じである。ここではダチョウの燻製を買っておやつとつまみにすることにした。

ブルームフォンテンの市街地に着いたのはちょうど12:00頃。昼食をとってスタジアム入りしたのが13:30頃。応援バスツアーの中では最初の方だったからか、日本のメディアに囲まれた。「今日のスコアはどうだと思いますか？」と聞かれたので「2-0で日本の勝ち！」と言ってみた。本当は日本の3連敗の可能性を想定していたのだが、「どうですか？」と聞かれて敗戦を予想することもない。それに少しずつ「勝てるかな？」から「勝ちたい」「勝たなアカン！」という気分になって来た。

セキュリティを越えて管理エリア内に入り、まずは自分の座席を見つけた上で、うろうろすることにした。すると後方から「中塚先生！」と呼ぶ声が。振り向いてみると、見たことのある男性が立っている。「108回生の宮本です。野球部の」「あ〜、おまえ何でここにおんねん？」

彼は大学卒業後、ミズノに就職し、いまは大阪勤務。サッカーシューズを担当しているらしく、今回は半分仕事、半分応援で、同僚と来ているという。本田、阿部、岡崎、中村憲剛と4名のミズノスパイク愛用者がいたが、「応援に来たぞ〜」ということを彼らに伝え、ともに戦おうとしていた。

うろろろしていると、JFAの指導者養成でおなじみの足立さん、池内さんに会った。ヨココムの福島さんは近くの席で、ウルTRASに混じって応援している。ここではいろんな人に会う。

ビールは30ランド(約360円)。普通に買うともっと安い、ここはワールドカップの競技場。銘柄もスポンサーのバドワイザーしかない。瓶のようなつくりになっているが、実はプラスチックの容器で、なかなかのすぐれもの。競技場内に持ち込んではいけないと言われたが、持ち込んでいる人もいたので、実はどうでもよかったのかもかもしれない。

<日本 vs カメルーン : 歴史的勝利>

キックオフが近づくにつれ、場内は盛り上がりを見せ始める。私がいる席はメイン側の、ウルTRASがいるすぐ後ろ。基本的に空席だらけだったので、席は勝手に移動してかまわない。宮本君と隣り合って、ブブゼラを吹いたり(だいぶ吹けるようになった)、「ニッポン!」と叫んだりしながら、興奮してみていた。

16:00キックオフのこのゲーム。守備的な布陣の日本代表だったが、それ以上に守備的なカメルーン。エトーは中盤に下がっている。全然こわくない。そのうち、松井の右からのクロスがDFの頭上を越えて本田へ渡り、カメルーンのゴールネットを揺らした。1-0。日本サポーターは俄然盛り上がる。

後半になっても様子は変わらず。前半よりも攻撃的になったカメルーンだったが、日本も防戦一方というわけではない。最後のピンチもかわし、終了のホイッスル。やった〜

日本以外で開かれたワールドカップで初の勝利。歴史に立ち会うことができたことはうれしい!

バス乗り場では、皆興奮している。よく見ると、南アフリカの小中学生の団体も結構いる(ジャージの背中に書かれている学校名でそれとわかる)。空席が予想されるゲームではこうやって地元の学生が動員される。どこでも考えることは一緒である。

18:30には現地を出発。帰りのバスの中は、比較的穏やかであった。5時間半もあるし、トイレ休憩もあまり保証できないので、飲みながら帰るわけにもいかず、大騒ぎすることなく、帰路に就いた。よその国の人たちだったら大騒ぎするのだろうか。高速道路が一部通行止めになっているとかで回りを余儀なくされたが、それも大したことなく、予定どおり、深夜0:00にはホテルに戻ってきた。

私以外のツアー客はそのまま部屋に戻ったようだが、ここはやはり南アフリカのワインで乾杯したい。そこでホテルを抜け出し、空港の方へ向かっていったところ、黒人の警備員に呼び止められる。「どこへ行くんだい?」「ワインが飲みたくて。空港へ行けばあるかと思って」「ワインならホテルにあるよ」。ということで、その警備員に連れられて再びホテルへ。そこで効いたのが、日本から持っていた日本代表応援手袋とバンダナ。「君にあげるよ」と渡してあげると、彼はすごく喜び、「Friend、Friend、」と繰り返す。そのままホテルのバーに戻り、すでに閉まっていたレジを開けてもらい、ミニボトルのワインを3本買うことができた。

部屋に戻り、ワインをあけ、サービスエリアで購入したダチョウの燻製をつまみに飲む。至福の時。

■6月15日(火)

<アフリカ民芸品を購入>

8:10起床。前日、シャワーを浴びていなかったもので、モーニングシャワーを浴びていたら、部屋の電話が鳴る。徳田さんから、「梶野さんが来ていますよ」とのこと。さっさとシャワーを浴びてからフロントへ行ってみると、東京都サッカー協会フットサル委員長の梶野さんがいた。ヨハネスブ

ルグにいま着いたところで、すぐビクトリアフォールへ出かけるとのこと。つまり南アフリカへ入国したと思っただけでザンビアへ。そのあとはダーバンへまわって日本 vs オランダを観戦する予定らしい。ビクトリア滝も行って見たかったけど時間がなあ…。

朝食をとってから部屋に戻り、いろいろ整理をしてから 11:30 過ぎにホテルを出て空港方面へ。夕方まで時間があるので、市内へ出てショッピングを楽しむことにした。

サントンへのハウトレインのチケットがまだ半分残っているの、それでサントンへ出かけ、あとは現地で色々聞いて回ればエエかと思って駅へ向かって歩いていると、南アフリカ人の黒人男性が声をかけてきた。「来たな」と思ったが、一方で「うまく利用してやれ」とも思い、逆にこちらから近づいてやった。日本からワールドカップを見に来たことを述べ、先方の氏素性を確認した。彼はネームカードを出してきた。「タクシー運転手兼ガイド」のトムという男である。大柄で気さくな感じであるが、静けさもある。「アフリカの伝統的なおみやげを見てみたい」ということを言うと、「それならローズバンク・モールがいい」とのこと。「フォー・トゥエンティ (420R) で、ガイド付きで、ローズバンクモールを回ってサントンへ行けるけどどうだ？」という。ちょっとばかり計算してみたが、めんどくさくなって、「わかった。それで行ってくれ」ということにした。トムとの珍道中の始まりである。

「トム」という英語名を持っているが、本当の名前は「スィルロ・マチャケ (Macheke)」。スィルロというのは「Cry on Moan」という意味らしく、彼が生まれたとき、父の友人が亡くなり、そういう名前がつけられたらしい。悲しげな名前やなあと思った。彼はツォンガ族。リンポポ州の出身で、19歳の時、仕事を求めてヨハネスブルグへやってきた。まずはホテルの清掃員。次にウェイター。Barron Corporate という会社に就職し、ホテルマネジメントに携わるが、会社を辞めて Fedix Food Service に再就職。1994年にマネージャーとなり、1997年には SA Airplane (南アフリカ航空) に。いまは独立してガイドの仕事をしているとのこと (話を聞きながら車の中で書いたメモをもとに再現しているので、ところどころ間違っているかもしれない)。

彼の奥さんはズールー族。三人の息子がいる。長男のドゥドゥズィ (Mduduzi) はズールー語の名前で、Comfort という意味らしい。10歳からオーランド・パイレーツでプレー、U-20南アフリカ代表が優勝したときのダノンカップではキャプテンを務め、いまやU-23代表のメンバーとして活躍しているプロサッカー選手らしい。オーランド・パイレーツとは、ヨハネスブルグに古くからある人気クラブで、トムに聞くと1937年創設。エリスパークやヨハネスブルグ・スタジアムを使ってゲームを行うという。プロサッカー選手のお父さんとこんなところで一緒になるなんて… (けど、うそかもしれないぞ…。あとで確かめよう)。

次男は「ターボ (Thabo)」。これはソト語で Happy という意味らしい。もう一人「トゥラニ」という三男はズールー語で Quietness の意味。

そんな話をしつつ、こちらもいい加減な英語で日本という国、私の周辺を紹介する。おもしろかったのは、彼が「南アフリカには4,000万人も人が住んでいる。日本はどうだ？」と聞いてきて、「1億2,000万人おる」ことを言うと、「南アフリカよりも多いのか？」とびっくりしていたこと。あまり知られていないようだ。けど前日のゲームで日本がカメルーンに勝ったことは知っていた。サッカーが、互いの国を知るきっかけになる。

彼の息子はオーランド・パイレーツ所属だが、トム自身はカイザー・チーフスのファンらしい。アメリカのアトランタ・チーフスでプレーしていた「カイザム・ダウン」という選手が南アフリカに戻ってきて作ったクラブがカイザー・チーフスで、こちらは1970年創設。アパルトヘイトの時代も、撤廃後のいまも、サッカーはこの国の大多数の人々にとって最大の娯楽である。

ところで、問題のローズバンク・モールだが、確かにアフリカ民族ものがたくさん並んでいる。てっきりトムが案内してくれて、私のニーズに合うものを、店員と交渉しながらやってくれるものと思っていたが、そうではなかった。そのように依頼したのだが、「アンフェアになるからダメだ」と。

交渉は自力でやれということだろうか。言われてみるとその通りである。しかしこちらはものの価値がわからない。結局、曲がりくねったブブゼラを 100 ランドで、バッファローの角でできたスプーンやフォークを 20 個、相当値切っていくつか買い、さらに「足の調子がよくない母のために、なにか効き目のあるものを買いたい」というと、「祭のときに使うスピリチュアルなお面があるぞ」（こんな感じの会話のつもり）と紹介してくれたのが、1,200 ランドの値札がついているお面。それを 500 ランドにまけてもらう（値はあってないようなもの？）。調子に乗ってもう一つ、弟にももう少し小振りのお面を買ってやろうと思い、750 ランドの値札がついているお面を購入。これも交渉したが、結局「あわせて 1000 ランド」になった。あとで買った小振りのお面が割高になった感があるが、1,000 ランドでお面二つは、そのときの自分の気持ちとしては「いい買い物をした」という感じであった。けど、1,000 ランド=12,000 円も出してお面を二つ買うつもりは、もとはなかったのだから、どうだったのだろう…。

帰りはハウトレインでと思っていたが、ここでお金が足りなくなったことに気づいた。いい加減なものである。そんなに現金を持っていなかったのが悪い。結局トムに空港隣接のホテルまで戻ってもらうことにして、そこでキャッシュカードで現金をおろして支払うことに。

結局、往路 420 ランド、帰路は 350 ランドの計 770 ランドをトムに支払うことになったが、めんどくさかったので 800 ランド渡した。12 を掛ければだいたい円換算できる。約 9,600 円。

このミニツアーが、自分にとってよかったのかどうか。これは「だまされた」のか「収穫だった」のか。価格の相場がわからないし、スピリチュアルなお面の価値もわからないので何とも言えない。

けど、他では体験できないことができし、トムとのやり取りも非常に面白かったので、いまではよかったと思っている。

<エリスパーク：ブラジル vs 北朝鮮>

空港で遅い昼食をとり、少しお土産を買ってからホテルへ戻る。

部屋へ戻ってみたところ、セキュリティボックスが開かなくなって、ホテルのフロントへ電話して来てもらい、直してもらう。16：30 過ぎになっていたので結構あせった。

17：00 にホテルのロビー集合。バスでエリスパークへ移動。20：30 からのゲームはブラジルと北朝鮮である。

聞いていたとおり、エリスパークの周辺は、何となく殺伐とした感じ。どの家も高い塀で囲まれ、鉄条網を張り巡らせている。ここは「近寄ってはならない」といわれていたダウンタウンの近く。降りたところの商店は、レジが鉄格子の中にあった。

現地へ着いた 17：30 過ぎには、辺りは暗くなっていた。20：30 のキックオフまではフリーで動ける。私はブラジルカラーのブブゼラを 100 ランドで購入（いろいろ飾り付けしてあったから高くはないと感じた）し、それを吹きながら入場口へ。ブラジルの初戦なので、ブラジル人があちこちで盛り上がっているが、同じ黄色でも、南アフリカのユニフォームを着ている人も大勢いたように思う。入場の際、私の後ろには中国人のグループがいた。世界中から人が集まってきている。けど北朝鮮のサポーターらしき人は、ほとんど見かけなかった。

エリスパークをひととおりぐるっと回る。ラグビー場だけあって、エグゼクティブ用のスカイシートはゴール裏にある（サッカー場の場合はむしろタッチラインに面した側にある）。四方から張られたロープをによってピッチ上を空中移動するカメラが非常にすぐれものだと感心した。

試合前は、景気づけにビールを飲む。例のバドワイザーである。売店で一緒になった欧米人風の男がスコットランドのスカートをはいていたので、「スコットランドから来たのか？」と聞いてみたら、「オーストラリアから来たけど、先祖はスコットランド出身だ」とのこと。ビールを飲んでうろろろしながら、いろんな人とコミュニケーションを楽しむひとときであった。

日本から持っていった手袋が、コミュニケーションに役立った。

持ちものを交換しようとブラジル人に声をかけたところ、旗もマフラーも一つしかないので譲れないとのこと。しかし彼は、私が用意していた手袋がほしかったらしく、それを売ってくれという。いくらで買う？と聞くと、5ドルでどうだ、と。交渉成立。彼の父親が手袋を持っていなかったのも、買ってあげた孝行息子の物語である。東京都サッカー協会でもらった手袋が5ドルで売れた。

この日の座席も前の方のかなり良い席で、周りは国際的である。後ろの席にいたのはメキシコ人の4人家族。大学生風の息子は、なぜかドイツのユニフォームを着ている。彼らに手袋をプレゼントしてあげるとえらく喜んでいて。前方のブラジル人二人組みにもプレゼント。皆大喜び。はめ方を間違えているので直してやった。前の席はアイルランド人の3人組が氣勢を上げている。顔を緑色に塗りたくっているのはアイルランド人だとすぐわかる。おもしろい。最後に、私の少し先にいたブラジル人と盛り上がり、着ていたユニフォームを交換した。行きは日本代表のユニフォーム、帰りはブラジル代表のユニフォーム。こういうのもいいだろう。

試合そのものは、思い切り守備的に戦う北朝鮮をブラジルが攻めあぐねる展開だったが、後半、右サイドバックのマイコンのすごいシュートと、絶妙のスルーパスからのゴールが決まり2-0でブラジルがリード。このまま終わるかと思ったら、北朝鮮が意地を見せて1点返すという、なかなか面白いゲームであった。

この試合の出会いの特筆ものは、アイリーンとヴィニシウスのブラジル人カップルとの再会であろう。ハーフタイムに行ったトイレの前で、ばったりヴィニシウスと再会。4年後に会おうといていたのが、2日後に会えるなんて…。彼らと一緒に撮った写真は思い出の1枚である。

とにかくこの日は寒かった。3度という報道であったが、真冬のコートを持って行ってよかった。

ホテルへ戻った。この日はバーが開いていたので、正規の手続きでワインのミニボトルを購入。部屋で1日を振り返りつつ、飲んだ。それが南アフリカでの最後の夜であった。

■6月16日（水）

<ヨハネスブルグを発つ>

朝風呂に入ろうとバスタブにお湯を入れ、さあ入るぞと思ったら水のまま。湯船に浸かることはあきらめてシャワーにした。どうやら故障で、どの部屋もお湯が出ないとのこと。残念！

朝食は、JFA審判委員長の松崎氏と一緒にとった。西村氏と相楽氏が評価されているのを喜んでいて。プレトリアでFIFAの審判団が研修を行っているのも、そちらへ行くらしい。JFAの理事の方々はそれぞれに観光。まあそれもよいだろう。

11:00の集合まで、荷造りをしたり、記録を整理したり。

そして空港へ。ホテルを離れるのが寂しい。空港で中に入るのが惜しい。もっといたいし、もっともってやっておきたいことがある。けど仕方がない。中へ入り、免税店でおみやげを購入しているうちに、出発の時刻になる。

<エミレーツ航空機内>

帰りはどこでどのタイミングで寝ようかと考えていたが、ヨハネスブルグ～ドバイは結局寝ないで、映画を2本見た。「インビクタス」と「2012」である。お得な感じ。

ドバイ空港は深夜だったが、多国籍の人々であふれかえっている。

空港で安里氏に会ったので、2時間ほどのトランジットの後半は、「ちょっと飲みますか」と、空港のバーで軽く飲んだ。ドバイ～関空の飛行機も、最初はワインをもらい、気持ちよく飲んだ。

旅の終わりはいつももの悲しい。「南アフリカなんて遠い国は、こんなことでもない限り二度と行かれへんやろから…」と言っていたが、また来たいの思いは強い。

そして2014年。次はブラジルである。次回も是非…。

■全体を振り返って

1. コミュニケーション

外国へ行くといつも思う。「もっと英会話やらな…」。

大雑把なコミュニケーションはできる。しかし、突っ込んだ話になるとわからなくなるし、伝えられない。もどかしい。NOVAの倒産が痛いなんて言ってもらえない。しっかりやらな…。

もう一方でいつも思うのは、語学を越えたコミュニケーションの重要性である。

「伝えよう」とする意志があるかどうか。「伝えたい」中身があるかどうか。それさえあれば、どんな言葉を使っても、大体伝えることはできる。同じ人類である。サルと話しているわけでない（ときどきそういう高校生はいるが…）。その状況で伝えたいことは、想像力を働かせれば大体わかる。

それでも語学はやらななあ…。

また、コミュニケーションを促進させるものについてもいろいろ感じた。少なくとも今回の南アフリカにおいて、「ブズセラ」は最高のコミュニケーションツールである。ヨハネスブルグの空港で、買ったばかりのブズセラを吹いていたら（空港で吹ける雰囲気もいい）、南アフリカ人が寄って来た。おもしろかった。やってみることが大切！

ワールドカップへ行くたびに思うが、ユニフォーム、国旗によるアイデンティティの表出は不可欠である。「お前は何人やねん？」ということを確認に伝えるわかりやすい手段である。しかしブラジル vs 北朝鮮のゲームに、せっかく日本代表のユニフォームを着て行ったのに、「お前はコリアンか？」と聞かれ、さらに「ニーハオ」と言われたのには参った。欧米人には、東洋人の顔はわからないらしい。もっともこちら、キミたち（白人、黒人間わず）の出自はまったくわからんけどな（だからサポートする国のユニフォームぐらい着とってくれや〜となる）。

2. 出会い・再会

日本国内ではめったに会わない日本人に、ワールドカップ開催国の会場や観光地で会うというのは、これまでもよくあった。今回もそういう出会いが楽しかった。

もちろん、世界の人々との出会いでおもしろい。現地代理店のツアーに参加したことが大きかった。ブラジル人カップルとはいまもEメールでやり取りしている。こういう関係を大事にしていきたい。

何と言っても、“人類の祭典”である。世界の人々と友達になるチャンスである！

3. 治安

日本での報道は「南アフリカは危ない」ばかり。それに怯えて渡航をあきらめた人もいただろう。危ないところは危ない。それ以外は普通（注意しながら生活する）。当たり前。

メディアの情報に振り回される前に、ちょっと冷静に考えたらいい。

そこでも人は暮らしている。危ないところには近寄らなければいい。それは地元の人が知っている。その先は人それぞれ。私は、いらんところでは勝負しない。だから今回は快適だった。

4. 南アフリカ

大変おもしろい国である。けっこうはまった。けどできなかったことの方がはるかに多い。

- 1) 自然（動物）との触れ合い … 行ってみたいところが山ほどある！
 - 2) 草サッカー … 時間がなかった。ソウエトで子どもたちとやりたかった。
 - 3) 食文化の堪能 … あわただしくて楽しめなかった。ワインがうまいことはわかった。
- ということで、また行きたい！ ワールドカップのないときの南アフリカにも行ってみたい。そして次のワールドカップは2014年のブラジル。次回もよい研修を行いたい。